コスタリカ研修紀行

牧瀬　明弘

本報告は1996年6月8日～17日まで10日間のコスタリカ、メキシコへの海外出張で、目的地はコスタリカOTSのla.selvaでの研修である。今回の参加者は神崎林長、竹内教授、大畠助教授、高柳講師、長谷川助手、藤井技官、境技官、竹内ジュニア、私とアメリカから通訳として石井氏の総勢10名となった。

すでに演習林集報第30号において「野外教育研究施設の運営と大学演習林ーラ・セルバ生物学ステーション視察報告ー」で発表されているので、重複する部分もあるが、ある程度省略させていただき、紀行文として書いてみた。

以下にla.selvaの概略を少し述べることにする。

熱帯研究機構（Organization for Tropical Studies）の使命は「熱帯の自然資源の賢明な利用と研究・教育に関連した指導者を養成する」ことである。長期的な目標として、OTSを熱帯生物学およびそれに関連した分野の、世界の情報センターとするという期待も持っている。この目標を達成するには、OTSは今後とも熱帯生物学者たちのトレーニングを継続し、研究施設の供給と維持を続け、熱帯生物学のあらゆる側面についての情報、利用の便の向上を図っていかなければならない。

la.selvaはOTSによってその主フィールド．ステーションとして所有されかつ運営されている。la.selvaの開発と管理は、熱帯生物学と関連分野の研究・教育の指導者の養成というこの組織の使命によって方向付けられている。

la.selvaでの研究機構等の概要を簡単に述べれば次のようなものである。

研究利用：la.selvaはフルタイムのスタッフによって管理されており、年中一般の科学者に開放されている。研究者はすべて外部から利用申請を提出して利用する。

一般環境教育：主な目標は、一般の人達の教育と知識の増加を促進し、良識を養成させ、そこの科学者との交流を積極的に促すことである。近隣児童、生徒の教育など地域の小学校や工業高校と緊密なコンタクトをとっている。

基盤整備：アクセスとして全域にトレイル（歩道）の設置、始点から50m毎に距離標識の設置。使用頻度の高いトレイルは板道とし、さらにコンクリート舗道にする（巾は60～150cm）。

位置表示については全域に50×100mのメッシュが設定されており、メッシュ交点およびメッシュ線とトレイルの交点にx.y.z座標を0.1m精度で表示、GIS(Geographic Information System）と連携。また資料としては、データベース、位置情報システム、各種動物、植物分布、業績検索リスト、研究者のデータ、研究活動記録などを利用することができる。

その他施設等については、完全空調の実験室、各種分析装置、図書室、宿泊施設、賄いなど各種支援システムが完備されている。

一般ビジター：一般ビジターに有意義な時間と体験を供給するために、パブリックセンターを設ける。また入林時には必ず地元のナチュラリストのガイドが付くことになっている。

地域住民との関係：地元の人達のナチュラリストガイドの養成などにより、地元住民への収入還元。また地元の理解と協力を得るための協力体制をしいている。

以上、記したようにかなり完璧な運営、管理がなされているようだ。今回私の研修課題はla.selvaの施設見学、地域住民との関係およびナチュラリストガイドの養成について等で、神崎林長が提案された演習林運営指針にかなり取り入れられるものがあると思われる。la.selvaのyanng所長始め多くのナチュラリストガイドから説明を受け、資料を収集した。

初めての海外旅行である。訪れるのは熱帯雨林、持ち物も一般観光とはかなり違う。作業衣、長靴（雨、毒ヘビ等の予防）、蚊取り線香、虫よけスプレー、傘、携帯灰皿、水筒、資料と荷物が多くなる。それにla.selvaのおみやげ、写真機、衣類を入れればバッグのチャックが閉まらない。やむなく重いズームレンズを出す。その他あふれた荷物はナップザックに納める。家内が外国の水を心配し、パック入りのお茶を買ってきたのでそれも入れる。クスリはかかり付けの医者で腹、胃グスリ等を貰ってくる。なにか足りないような気もするが、これで一応準備は整ったが、肝心のスペイン語は本も買わず何も勉強はしていない。

６月８日（土）

関西国際空港を1時間遅れの18時にUA818便ロサンゼルス行きB737は満席で飛びたった。中央４席の真中、足も組めない窮屈な席で10時間30分を機中で過ごすのは大変で、しかも禁煙席である。缶ビール１本とまずい機内食を２回食べ、眠ることもできず12時30分ロサンゼルス空港に下りた。すごい行列で入国に1時間30分もかかり、旅行会社が用意した休憩のラマダホテルに着いたのは14時30分。シャワーを浴び、冷えたビールでしばし休憩。

20時、ホテルのバスで再びロサンゼルス空港へ出発、食事を済ませ飛行機へ。23時45分UA865便は夜の空へ向けて飛びたった。スチュワーデスが早口のスペイン語でまくしたてるが、何をいってるのかさっぱりわからない。0時30分ごろ機内食が出るがこれもうまくない。ウイスキーの水割を２杯飲んで眠ろうとするが眠れない。やがて空も明るくなり4時20分エルサルバドルに着陸。半分ぐらいの乗客が下りる。機外にも出られずタバコも吸えない。1時間後の5時20分やっと飛ぶ。

６月９日（日）

B757は7時間10分の飛行を終え7時30分コスタリカのサンホセ空港に着陸した。入国はいたって簡単に終る。日本との時差は15時間、睡眠不足で頭がぼうっとしている。

コスタリカは太平洋とカリブ海にはさまれた、四国と九州を合わせたほどの小さな国で、中央に火山が連なる山脈が走っている。変化に富んだ地形で、熱帯雨林や海、川は貴重な動植物の宝庫である。国土の13％が国立公園や自然保護区に指定されている。平和憲法をかかげ、軍隊は持たず、教育に力を注ぐ民主国家である。そして治安も安定していると聞く。

タクシーでホテルイラズへ、車窓からみるサンホセの街はあまり美しいとはいえない。8時に到着、チェックインを済ませ今日これからの行動を相談する。

神崎林長がホテルの案内所でRain Forest内にあるAerial Tram（索道ワゴン）を見つけここへ行こうと決定。料金は往復の車、ガイド、入場料も含めて65ドル。それを61.5ドルまで値切る。

一行7人（神崎、竹内、大畠、境、石井、ジュニア、牧瀬）は10時にロビーへ集合。残る３人組は、レンタカーを借りて何処かへ走るといっていたが、後で聞けば全員免許証を持っておらず、近くの国立公園をタクシーで見学してきたらしい。

サンホセからハイウエーを走って約1時間、雨林公園に着く。入場券を胸にはってトラック改造のバスに乗る。林道を少し走って降ろされる、川があり吊橋を渡り今度は少しましなバスに乗替える。途中見晴らしの良いところで一次林、二次林の説明を受ける。しばらく走りレストラン、Tramのある終点で、ここから熱帯雨林を歩く。ガイドが林内を歩くときの注意を与える。ガイドより前に出るな、歩道から外へ出ないこと、植物に手を触れないこと。これは森林を守ることだけではなく、毒ヘビ、大型の毒蟻から身を守るための指示である。

雨林公園のトラック改造バス

沢山の根を持ったユテルプスヤシ、猿が登れるようなサルノハシゴ等目をみはるものばかりである。30分程歩き元のレストランの所へ出てきた。

腹が減ったので昼食とする。メニューもなく何を食わされるかわからないが一人10ドル。大きな皿を１枚渡されコックが次々と入れてくれる。ぱさぱさのライス、黒豆の煮物、鳥の煮物、八方采の出来損ないのようなものをライスの上へぶっかける。それに大きなコップへスイカジュース。ジュースは水で薄めたようでほんのりスイカの味がするのみ。一方皿の方は香辛料の匂いがひどく、黒豆も変な味で一口でやめる。鳥肉の煮込みも少々臭いが我慢して食べたが、口中に匂いが残り食欲が進まない。

小休止の後Tramに乗る。6人乗りでガイドが付く。片道2.3kmで50mぐらいの間隔でゴンドラがぶら下がっている。ゆっくりとしたスピードで行きは熱帯雨林の地面から4～5mのところを行く。ガイドの説明で途中大きな木の葉のうえに小さな毒ヘビが見えた。帰りは高いところを通るため景色は良いが、適当にゆらゆら揺れるのでついうとうとと眠ってしまう。

帰り道、バス乗り場で誰かがナマケモノを発見、木の枝にぶら下がりゆっくりと動いている。10人ぐらいでガヤガヤと騒いでいるにもかかわらず、逃げようともしない。珍しいものを見ることができた。

16時30分ホテルイラズに帰る。今夜は年寄組（神崎、大畠、竹内、牧瀬）はホテルで食事をとる、若者は街へ出ていった。ステーキ料理でやはり少々臭いがなんとか食べれる。ビールの小瓶を2本飲む。食事後バーでテキーラを一杯、かなりきつい。

11時ごろ今回の旅で始めてベットで横になる。二晩飛行機で過ごしたことになり、疲れたのです

ぐに寝入ったようだ。

６月２０日（月）

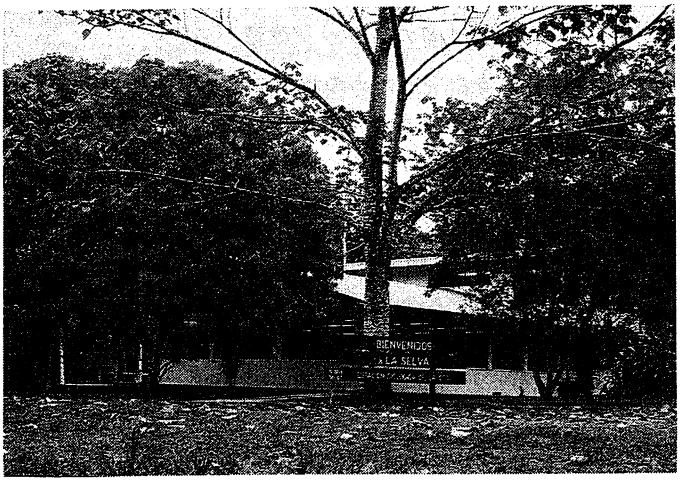
7時に年寄組がホテルで朝食、若者は今朝も街へ出たらしい。大きなカップにコーヒー、ミルクがたっぷりと入ってうまい。トーストは２枚付いているが小さく薄くて昼まで持つだろうか。

8時30分、la. selvaから迎えのマイクロバスに乗る。サンホセの街中はあまり高い建物はなく、なんとなくゴミゴミしており、民家にはどうしてかすべて家も車庫も檻のような柵で囲んである。よく目につくのはトヨタ、ニッサン、ホンダの販売店があるが他国のはあまり見かけない。走る車はオンボロで、日本車が多い。トラックもバスもガタガタである。右側通行であるため少々とまどうが、街中では車が多いものの日本のように停滞はない。

交通機関は鉄道はなく、バスのみで各バス停には通勤者が大勢待っており、次々とバスがやって来る。鉄道は以前サンホセからカリブ海側のプエルト・リモンまでジャングル・トレインと呼ばれる列車があり、人気のツーリスト・アトラクションになっていたらしいが、1990年の地震の影響で現在は運行されていない。草に覆われ錆びたレールだけがむなしく残っていた。

バスはかなりのスピードで走る。街を離れればヤシ、バナナ畑が続き、道端でバナナ、マンゴー等を売っている。

10時10分la. selva着、Yanng所長みずからの出迎えを受け、各部屋の鍵を渡され荷物を置く。うまいコーヒーをご馳走になりながら宿舎、売店および食堂利用についての説明を受ける。



la.selvaの事務室および食堂

10時30分よりビジターセンターでYanng所長よりスライドを使ってla. selvaの概要説明を受ける。木造の建物でテーブル付きのイスが30脚ほどあって、入り口付近には写真が展示されている。窓は網だけで、天井では大型の扇風機が回っている。さすがに暑く汗が流れてくる。

la. selvaの構成員は全員で45名、うちディレクイター2名、ガイド5名、会計3名、売店3名、メンテナンス21名、厨房関係6名、パトロール4名、ドライバー１名で、うち30名が地元の人達である。

年間利用者は、研究者250人、学生1,300人、見学、ミーティング1,440人、一般訪問者が1,000人で、人数×滞在期間で表すと年間22,000人である。またトレイル、植生、動物等についての説明もあったが、後でおりにふれ述べることにする。

la. selvaの施設は大きな川（プエルト・ビエホ）を境に両方にある。川の手前はバスで入ってきた所で、事務所、食堂、作業所、研究者の家族用宿泊所、それと我々の入っている宿舎がある。川を長い吊橋で渡った先はビジターセンター、図書館、各研究室、それに職員用宿舎などがあり熱帯雨林に続いている。車は入ることができない、これは排気ガスから森林を守るためであろう。

さて昼食の時間である。昨日のRain Forestと同じように皿が1枚。堅いライス、そこへ黒豆とかじゃがいも等のごっちゃ煮をかける。それにサラダ、トマト、ジュース、コーヒーはいくらでもどうぞであるが、やはり匂いが鼻につきあまり食は進まない。

夜のビールは5時で売店が閉まるので自動販売機のビールコインを購入しなければならない。小瓶が１本130コロン（70円ほど）でまずは3枚購入、ドルは使えるがおつりはコロン。

13時からは所長夫人よりla.selvaの事務機構および経費等についての説明を受ける。まず事務室に案内される、食堂の２階が事務室で、ここは冷房が完備されている。エキゾチックな女性職員が多く、会計係長も女性でなかなかの美人で、みな愛想がよい。ちなみに会計係長の給料は1,000ドルで、一般の男性施設関係職員は200ドルで、かなり高給取りである。しかも独身らしくla.selva内の宿舎に居住しており、食事はすべて食堂を利用しているようである。

コスタリカはスペイン系を主とする白人とその混血97%、黒人3%、先住民2%で美人が多い。

ちょっと脱線したが、la.selvaの歳入については、利用料49%、援助金42%、その他売店の売上げ等となっている。今回我々の利用料金は、３泊４日で食事付き１人約270ドル（30,000円）であった。

職員の勤務時間は1日8時間、週48時間。勤務時間は午前6時～午後2時30分で、これは施設関係の人達で、事務、売店等は午前7時～午後5時のようである。有給休暇は年15日、別に2週間の連続休暇がある。さらに5年以上の勤務者にはボーナス休暇が与えられる。
la.selvaは年中無休のため交代で休暇をとるが、施設関係の人達については日曜日が休みとなっている。

職員の昇給はコロンの変動およびインフレ調整で年2回で5～10%程度。昇給についての資料は所長が作成するが、最終決定はサンホセのOTS事務局でなされる。ちなみに所長夫婦の場合はと聞くと、現在は2年契約で継続については事務局が決定し、2年毎に再契約をするというが、利用等の実績が上がらなくては大変だと思われる。資料も提供され、もう少し説明があったが、私のメモには以上のことしか書き留めていない。

14時30分からはVicter氏の案内で、昆虫類の標本作成および図書館、研究施設の見学、説明を受けた。

昆虫類の分類、標本作成は、3名ほどのスタッフで作業が進められている。小さなものは2～3mmぐらいから数cmの昆虫で、顕微鏡を覗きながらの細かい仕事であり、それに付けるラベルがまた細かい。かなり集められているようだがそれらの展示施設はないようだ。

つぎに過去に多くの研究者が残していった物品庫の案内を受ける。Victer氏は物品管理が好きなのか、ダンボール箱に入れて完璧に整理されている。次回の研究のため一時有料で預かる場合もあるらしいが、残していった物品は新しい研究者が必要とするなら提供するという。

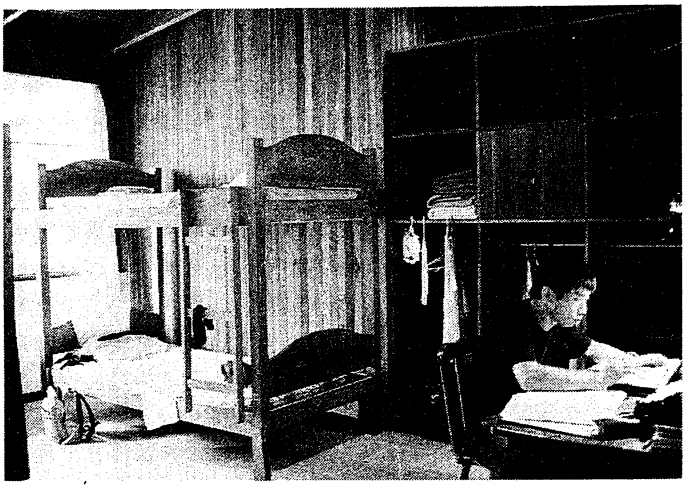
クーラー室に入ったり、蒸し暑い外に出たりで体がぐったりする。立ったままの長い説明は17時で終了した。

宿舎の廊下の長イスで冷たいビールを飲む。さすがに熱帯雨林の日中は蒸し暑いが、夕方になれば比較的過ごしやすくなる。

宿舎はIGUANAという名前がつけられ、木造平屋建で、一室4人で二室に1カ所、トイレ、シャワールームがある。窓には網がはめられているがガラス戸はない。部屋には2段ベットが2本、机、椅子が備えられ、内外ともに掃除が行き届き、きれいなシーツも用意されている。天井からは大

きな扇風機がプルプルと風を送っている。

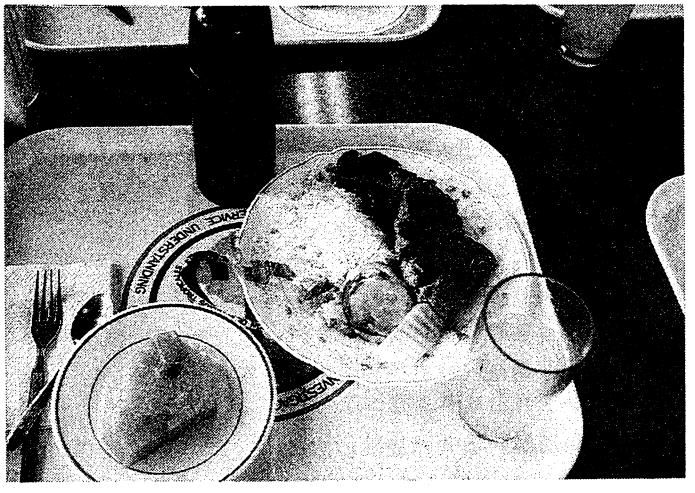
18時食堂へ、すでに多くの外国人、とくにアメリカ人と思われる研究者達が食事をしている。セルフサービス方式で、トナーに皿を乗せ例によってライス、ごっちゃ煮のぶっかけ、ウリ、トマト、いわしのような魚の揚げ物である。少しなれたのかすんなりと腹におさまった。デザートのアイスクリーム、これはうまかった。



IGUANA宿舎の室内

19時頃に暗くなる、星が美しい。北斗七星が手に取るように近くに見える。ホタルがたくさん飛んでおり、都会では想像もつかない美しい夜である。20時頃まで林長室でウイスキーの水割で、今日までの話しが弾む。水と氷は食堂にいつでもあり便利である。

今回の旅で大変重宝したものが、携帯用灰皿とポットである。部屋には灰皿がないため皆が私の灰皿に集中する。食事が終われば集まってくる、廊下で雑談すればまた集まってくる。6人が1本づつ吸えば灰皿は満タン、その都度火を確認しゴミ箱へ、灰皿係も大変である。もう一つのポットは食事の帰りに氷を入れてくる。これでの水割はうまい。林長と私が大阪の免税点でウイスキーを1本づつ仕入れてきた。



研修中の食事　一枚の皿にライスも惣菜も一緒に盛る

国外での水は一般的に下痢の素といわれているが、ここla.selvaの所長夫人の話では、地下水を汲み上げているので心配はない。むしろ暑いので脱水状態が起こるのでたくさん飲むべしとのこと。しかもうまい水であるのでついついウイスキーもすすむ。現場研修へは朝氷水をたっぷり入れてもって行く。

シャワーを浴び21時にベットに入るがそのときスコール、窓が開きっぱなしのため遠くからの雨の音が聞こえてくる。スコールが真上に来たらトタン屋根をたたき寝られたものではない。10分程でおさまったがまだ小雨が続いている。

6月11日（火）

3時に目がさめる。雨が降っている。昨日のYanng所長の話では年間雨量は4,000mm、しかも6月が二番目に降雨量が多いという。5～10月までは雨期で6～7月がピークらしい。昨夜洗ったタオル、下着はぜんぜん乾かずそのままである。雨が降りよほど湿度が高いのであであろう、むしろ部屋の扇風機の下の方が少し乾いているようだ。

朝食は早い、6時からである。地元の施設関係の職員の出勤時間は6時でありそれに合わせているかのようである。熱帯で午後は暑く仕事にならないので、早朝から働くのかもしれない。

7時より講義開始、今日の案内はOrlando氏、1時間あまりビジターセンターでla.selvaの研究者および訪問者等の状況説明を受け、さらにはガイドの状況、施設使用料等についての我々の質問にも答えてくれる。

幸い雨も上がり8時30分よりいよいよ待望の熱帯雨林を歩くことになる。早速歓迎とでもゆうべきか、アライグマの一種であろうか前方に姿を現す。写真を撮るのに近寄るがすぐ逃げようとはしない。

熱帯雨林のソクラティアヤシ

今日これから歩くのは約3時間、3～4kmのコースで、一般見学者および地元の学校の生徒が見学するコースらしい。コンクリートで舗装された歩道を歩く。これが〃トレイル〃である。トレイルとはいったいどのようなものであるのかla.selvaに来るまでは見当もつかなかったが立派なものである。巾は1.2m～1.5mで奥に進むにつれて0.6mとなる。さらにその奥は板張りのトレイルとなる。la.selvaの総面積は1,500haで、トレイルの全長は57kmあり、3年前に自転車専用トレイルとして巾1.5mのコンクリートを5kmが設置された。板張りのトレイルには金網が張られ濡れていてもスリップせず歩きやすい。しかし、この板張りトレイルは耐用年数が2～2.5年で、非常に手間がかかるので少しづつコンクリートに替える作業が行われている。

さて熱帯雨林であるが、木、葉、つる等すべてが大きい。日本にもありそうな樹木もあるがガイドが木の名前をいっているが、残念ながらすぐ忘れてしまう。ただヤシの一種で何本も根が出ておりトゲのあるソクラティアヤシというのだけは覚えた。

毒を持つ小さな赤いカエル、捕まえると喉を膨らませる小さなトカゲ、体長2～3cmの大きな蟻、この蟻は有毒で2～3匹にやられれば人間は参るらしい、と所々で詳しく説明してくれる。

la.selvaには1,900種の植物があり、哺乳類は120種、うち半分の60種がこうもりであるらしい。さらにカエル55種、蛇45種、うち毒蛇は7種、鳥類420種、蝶類4,000種が生息しているという。

11時頃より雨が降り出してきた。一次林と二次林の境界を歩く、以前はバナナ畑であったらしいが、それをOTSが購入し、二次林に仕立てあげたのだが、わずか10年程度で大きな林になり、我々の感覚ではとても二次林とは思われない。しかし蚊が多い、持参の虫よけスプレーでシューツと吹くが汗ですぐ流れる。ナンパツかやられる。雑誌の案内書にはマラリアに注意とあったがす

でに遅しである。

コースも終わりに近づいた。そこには見本林があり傾斜もゆるく面積もかなり広い。la.selvaの雨林にある樹種を２本づつ集められているそうだ。1.5m巾のコンクリートトレイルが縦横数本あり、車イスでも見学することができるという。このような施設の維持管理も大変だと思うが、我々の演習林でも専門ガイドと共におおいに見習うべきことが多くあった。

午後からはJennyさんのGISの説明およびYanng所長のマスタープランの話しがあったが、これらについてはすでに発表されているので省略する。

19時からは宿舎の神﨑林長室において全員集合でミーティング、今日までの講義、実習を受けた内容について疑問点、質問事項を整理し、後日Yanng所長より説明を受けることにする。たくさんの疑問点、質問事項が出たが、それらを同室の高柳先生が英文で纏めることになった。皆の意見を整理し英文にするには大変な仕事である。23時頃少々気の毒でありビールを差し入れて小休止。しかし当方も眠く大変悪いが1時にベットにもぐり込む。しかし気になって4時前に目がさめごそごそと起き私も今までの整理をする。先生は徹夜で頑張っていた、どうもご苦労様。

雨林内の見本林

６月１２日（水）

日本での勤務時間は、午前8時30分～12時までの3時間30分であるが、ここla.selvaでは7時～12時の5時間であり、午前中が非常に長い時間である。しかも途中にコーヒータイムもなくぶっ続けで講義、現地研修を行うものであり、だんだん疲れてきた。

今日は造林木の話で、車で20分程移動する。昨日からずっと雨が降り続き、持参の資料は湿りボロボロになってきた。首にかけたタオルも乾く間もなくボトボトで汗がじわりとわいてくる。雨の中、今日のガイドは傘もささずずぶ濡れになりながら熱心に説明してくれる。何種類かの木が植栽されているが非常に成長が早く、樹齢8年で樹高15～20m、直径20～26mと感心するばかりである。すでに間伐も終え、材質も堅く良材であるという。いずれもバナナ畑を購入し、造林地にしたものである。またパイナップル畑に列条に植栽された造林地もあり、地元農業者が将来バナナ生産のみならず、林業を併用することによって、いかに収益をあげるかを研究しているという。

午後は大気汚染の研究および二次林の研究がなされている現地研修であった。しだいに疲れが蓄積してきたのか、メモを取る手も動きが鈍く、しかも暑いのでなんとなくだらけてきた。

夕刻になると腹が減る。だんだんコスタリカの料理にならされたのか食が進むようになった。日本と違って昼に肉等の御馳走が出て、夜は比較的質素であり少々物足りないが食後のバナナはうまい。

19時から、昨夜ミーティングによって高柳先生が作成したla.selvaに対する質問事項について、Yanng所長から回答があった。la.selvaでの収入、支出関係および研究、一般見学者の受入れ問題について、夜遅くまで熱心に討論が続けられた。

朝は5時起き、夜は遅く、連日睡眠不足が続きなんだか体の調子が少しづつ落ちていくようだ。

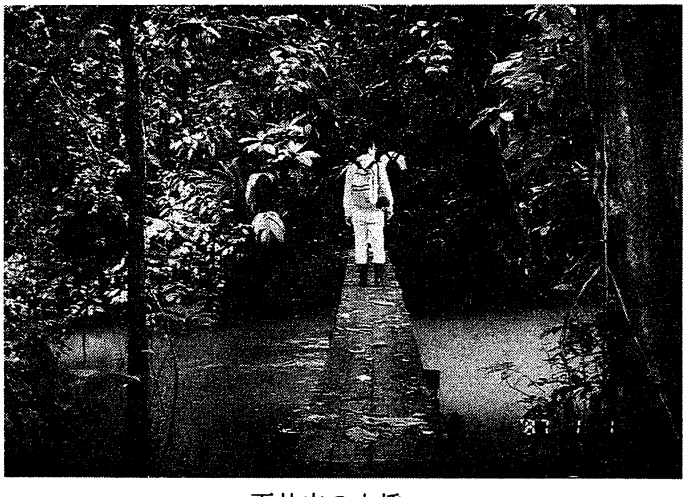
６月１３日（木）

5時頃に明るくなりかけると鳥たちがいっせいに鳴きだす。何種類いるのかわからないが、かなり特徴のある鳴き声を出すのもいる。外へ出てしばらくバードウオッチング、赤や黄色ときれいな色をしたのが次々とやって来る。今日はどんよりと曇っているが雨は落ちてきそうにない。la.selvaに来て4日目、最後の日である。初日の洗濯物がまだ乾かない、扇風機の下へ移動さす。

午前中は昨夜Yanng所長との質疑応答の結果、施設関係の話である。案内は施設係長のVikutory氏、まず最初は家族同伴の長期研究者用宿泊所であった。4～5人用の建物で、ベットルーム2室、食堂兼居間1室で、生活に関する備品はすべて揃っている。ただしテレビ、電話はない。我々の宿泊所は勿論のこと、la.selvaにはテレビは1台もなさそうである。また新聞等もなくこの中に居れば世の中で何が起こっているのか皆目わからず、明日の天気もわからない。しかし不思議なことに新聞、テレビが無くても不便だと思ったことはない。だが、長期滞在となるといかがなものか。

la.selvaにおけるフィールド、施設関係のすべての仕事は、ここ施設係の職員でこなしている。施設係長を含め全員で21名、建物関係は5人で、建築、電気、配管等専門職からなり、冷蔵庫、洗濯機の修理まで行っている。フィールドでは10人、4人編成の2班に分け、コンクリートトレイル、橋梁新設および保守管理等、もう1班はトレイルの草刈、施設、境界および樹木園等の草刈である。残る2人は木製トレイル専用職という。その他施設パトロール2名、密猟、盗伐等林内パトロール2名、これらはいずれもピストルを携帯しているようだ。他にドライバーといったメンバーである。また、労働力が不足した場合は地元から臨時に雇用することがある。

今後の課題としては木製トレイルが2～2.5年で更新しなければならず、コンクリート化にするとともに、木製橋梁の鋼鉄化等仕事量は多いようである。また作業を機械化することによって、能率を上げ人員増は考えていないという。機械化といっても我々から見ればチエンソーと草刈機ぐらいのもので、施設庫には丸鋸が座っている。57kmものトレイルが存在するにもかかわらず、運搬車、動力車というものはなく、もっぱら自転車で運んでいるようだ。環境問題もあろうが電気動力車とか、小型ミキサカーの導入は考えられないのだろうか。長いトレイルを一輪車で延々と生コンを運ぶのだろうか。草刈の現場へは連れていってくれたが、このときはたまたまトレイル工事はなかったようだ。　施設見学、説明は10時に終わり、今回始めての小休止。



雨林内の木橋

11時よりビジターセンターにおいてOrlando氏と現地臨時ガイドらと約1時間、ガイドの状況、待遇などの話しを聞くことができた。

主に現地の臨時ガイドの話であって、2人が参加してくれたが、ガイドの仕事は非常に楽しいという。現地で生まれ、現地で育ち、親から森林の取り扱い、毒ヘビの被害にあったときの応急処置まで、すでに自然に覚えている。また3カ月間のガイド養成コースも取っている。1日2時間のガイドで1日2回で4時間、しかも日給が2,000～3,000コロンで、実働が終われば帰ってもよい。民間であればきつい労働で、1日のガイド料は民間で働く1週間分の給料だという。今6月の臨時ガイドは週に4回程度あるらしい。多いときには毎日のようにあり、15日連続ということもあったそうだ。また英語で案内することができれば3,000～4,000コロンと、かなり収入も増えることになる。
一方Orlando氏のような正職員ガイドは月給は安いが、ボーナス等の支給があり、休暇も保証されている。また有給休暇に臨時ガイドを勤めれば、収入はその分保証されると現状を話してくれた。

短い時間であったが、臨時ガイドの状況がつかめたようだ。ただ、今回多くの方々の説明では、ガイドの人数、その他構成員の人達の数がまちまちであって、どれが正しいのかよくわからない点が多かった。

la.selvaでのすべてのスケジュールは終了した。4日間がまたたく間に過ぎ去った。見るもの、聞くものがめずらしく、イグアナ、アライグマ達にもあった。始めて見る熱帯雨林、なんともいえない蒸し暑さ、だんだんならされた料理の数々、Yanng所長始め親切な職員の方々、我々の要求にもすぐに対応してくれた。たとえ研究者であろうとも申請しなければ動植物採取の禁止、各建物は素足であるけるほど掃除がなされ、整然と運営されている。けっして職員が大勢いるとは思えない。施設係長のVikutory氏は各班長と相談し、月々の作業計画を立てるという。作業状況を見ていれば、日本人のように忙しく働いていないようだが、すべてが美しく整備されている。また、ここへ訪れる人達がルールを守り、自然を愛し、la.selvaを大切に扱っているのではないだろうか。そのような印象をもった。

今回我々がla.selvaについて、これほどの説明を受け、また質問をし理解できたのは、通訳として同行された石井氏（ワシントン大学留学、森林生態学出身）の語学によるものである。こまかいところまで気を配っていただき、大変疲れたようすであったが、おおいに感謝しなければならない。

14時、Yanng所長に礼を述べマイクロバスに乗りla.selvaを後にする。睡眠不足もありときどきまどろむが、再び目にすることができないであろうコスタリカの景色も見なければならない。大阪からの飛行機は途中乗換で18時間、日本から見れば地球の裏側で二度と訪れることはできないであろう。しかし、原住民の家、バナナ畑、ヤシ畑がだんだん霞んでゆく。

15時40分、サンホセのOTS事務所に到着する。所長からいろいろ説明を受けるが、目は開いているが頭は眠っている。何を聞いたのかわからないうちに終わってしまった。

17時30分、ホテルイラズ着、ここサンホセはla.selvaと500m以上の高低差があり涼しくしのぎやすい。ちょうど風呂から脱衣場へ出てきたような感じである。今夜は早く寝なければならない、明朝は3時起きである。

若い人たちは元気である。これからダウンタウンへ買物、食事に出るというのでついて行く。

神崎林長と大畠先生を残し18時20分にホテルのバスで街へ向かう。20分ほどで到着、商店街が沢山並んでいるがだんだん閉店する。目的の店も閉まり他の店を探すがもう開いている店はなくなった。しかたがないのでスーパーへ入る。いろいろ物色しウイスキー、コーヒーがうまいというので購入、その他チョコレートらしきものを少々、持ってきたバッグが小さくあまり入らないので控えておく。他の連中は沢山仕入れているようだ。

レジに精算にいく、言葉はまったく通じない、身振り手振りでやる。ドルも使えるがカードも可能というのでカードで精算する。伝票にサインしさて袋に入れようとふり向くと今買った品物がない。まか不思議、店員にどうしたのかと問いかけると、横から女性が私の肩をたたき手で後ろを見よという。すると、小学校1～2年生ぐらいの小さな男の子が目をキラキラさせながら、黄色いビニール袋を下げて私を見上げている。全部袋に入れてくれたのだ。このようなことは日本ではまったくなく、少しおどろいたがチップをあげなければならない。ポケットにはセントやコロンがじゃらじゃらしているが、とっさに幾らかわからないので1ドル紙幣を渡すと、飛び上がって喜んで各レジに居る友達に見せびらかしている。少し沢山あげすぎたのだろうか。もう20時である、かわいそうに遅くまで幼い子供達も家計を助けて働かなければならず大変である。

街の中はゴミが散乱しており汚い。街灯もなく店が閉まれば薄暗くなる。だが人通りは多い。

のどが渇き腹が減る、先ほど目にしておいた店頭でチキンの丸焼きをしていたこぎれいな店を探し歩き、ようやく入る。全員で8名、とにかく冷たいビールが飲みたい。ボーイにビヤー、本数は指で示す、これは今までちゃんと通用してきた。灰皿は左手を開き、右手でタバコをポンポンとすればそれで了解。あれこれ注文する、すごいのは石井氏、スペイン語も少しでき、彼のお陰で大変助かる。ビールがうまい、サラダ、スパゲティーといずれもボリュームがある。みな飢えてるかのごとく平らげていく。チキンも大盛りで出てきた。

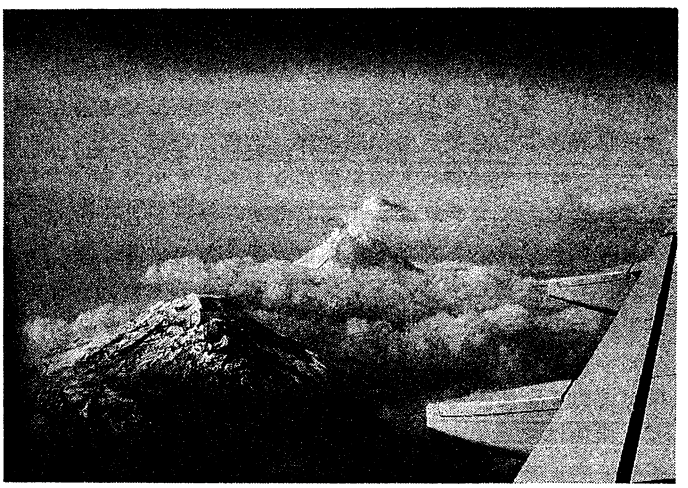
神崎林長はホテルで待っているからウイスキーを買って来いといったが、すでに21時30分、さぞかし怒っているだろうがそれは忘れて、今は飲んで食べることにする。久し振りに満足した食事であった。なかでも高柳先生がどこに入るのかというほどよく食べる。若いということは羨ましい。これだけ飲んで、食って1人12ドルとは安い。

22時過ぎタクシーでホテルへ帰る。もう遅いので林長の部屋へはいかない。今夜は藤井君と同室だ、荷物の整理をしシャワーを浴びる。買ってきたウイスキーを少しやりベットに入る。もう24時を過ぎている。

６月１４日（金）

目ざましを持って来なかったので、寝過ごすのが心配でたびたび目が覚める。藤井君もゴソゴソやりだす。3時前だが起きることにするがさすがに眠い。4時ロビーに集合。空港までタクシーで約20分、すでに多数の乗客が出国の列をなしている。

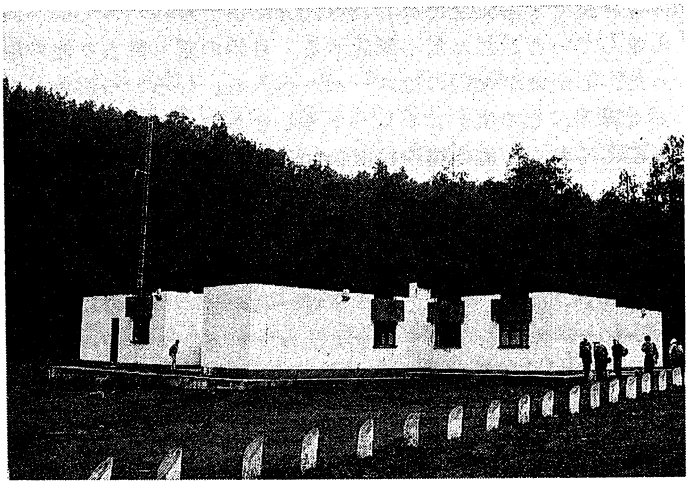
出国は簡単にすんだ。サンホセ6時発UA1020便、B757でメキシコシティーまで3時間を要する。機内は半分ほどの乗客で空



噴煙を上げるポポカルペトル山

いている。朝食が出たが頭がぼけてなにを食ったか忘れてしまったが、まずかった。メキシコが近づくと左窓に噴煙をあげる火山と、手前にもう一つ雪を頂いた高い山が見えてきた。帰って地図で調べてみるとポポカルペトル山5,452mとなっている。

やがてメキシコ市街の上空を右へ左へと旋回しながら降りてゆく。高いビルもあり道路も広い大きな街である。定刻メキシコ空港へ降りる。



チャピンコ自治大学演習林実習棟

機内を出て通路を歩いていたら、突然2人の警官が我々一行の前に立ち阻みパスポートを見せろという。このようなところでどうしてだろう。他の外国人は無視しており、日本人のみ要注意なのか。また入国も厳しく、持ち物はすべて開けて調べる。幸い全員無事通過したがかなりの時間を要した。１階まで降りこれで出れるかと思えば、再びこわい顔をした女性係官に止められ信号機の前に立たされる。何かわからないが前にあるボタンを押せという。ランプが二つあり青ランプが点灯する、これでOKでやっと外に出られた。一行は次々と青ランプで出てくるが、竹内ジュニアは赤ランプ、再び荷物検査、長い間ゴソゴソ調べていたがやっと入国できた。

今回のメキシコ入りは、以前大畠先生がマツの研究でメキシコに長期滞在しており、我々にもメキシコのチャピンコ自治大学演習林のマツを見学するために立ち寄ったものである。

空港には大畠先生のはからいで、JICAの井上さんと通訳のマリアさんが迎えに来てくれていた。メキシコ通貨をとりあえず長谷川さんが代表でペソに交換する。

チャピンコ大学のバスに乗り込む。空港付近はすごい停滞でノロノロと走る。どの車を見ても汚く凸凹だらけで、コスタリカとは違い日本車は少ない。タクシーはほとんどが青く塗られたフォルクスワーゲン（かぶとむし）。地下鉄も走っており、地上に出たり地下に入ったりしている。車と違って電車は美しく、６～７両編成で頻繁に走っている。街といえば汚い。ゴミが散乱し、壁には毒々しい色で広告が施され、広場には屋台のような店がところ狭しと並んでいる。野良犬であろうか、やせ細ったのが数匹たむろしている。

乗り合いバス（ティオ）のようなマイクロバスが沢山走っているが、ドアは開けたまま、窓ガラスは割れフロントガラスにもひびが入っている。後で井上さんに聞いたのだが、アスファルト道路にもかかわらず石ころが多く、跳ねた石で割れるらしい。これらを見ていると日本は美しい国だなあと思ってしまう。

いつしか高速道路のようなところを走っているが、どんどん登っているようだ。空港から１時間ほど走り、右へ折れ林道になった。チャピンコ大学演習林への道であろう。この道も登る一方で、両側はすべてマツ林である。林道を30分ほど走って演習林に到着。　100m四方ぐらいの盆地の中にコンクリート造りの建物が３棟ある。あとは何もなく広場になっている。周囲はマツで覆われており、他の樹種は見当らない。かなり登ってきたので寒くジャンバーを着る。バスから降

りると少し息苦しい。所長らしき人の説明によれば3,280mの高さだという。槍ヶ岳より100m高いところに居るわけだ。一般に3,000mを越えると息苦しくなるという。大畠先生がこの演習林は、先ほど飛行機から見えたポポカルペトル山の中腹であるという。

あまり美しいとはいえない実習棟の講義室に入る。立派なヒゲをたくわえた所長らしき人の説明で、演習林の面積は1,638ha、標高は3,300～3,900m、年間雨量1,180mm、気温は-3℃～+18℃、寒い時期は11月～3月までで、積雪は60cmである。植生はほとんどがマツで、Pinus 65%、Abies 25%、Alnus 10%で、動物はコヨーテ、リス、ウサギ、シカ等が見られる。また一帯が国立公園に指定されており、大学の土地として認められてはいるが、木材の生産はしていないという。これだけ多くのマツが植栽されているにもかかわらず、生産していないとはどうしてかと思っていたら、大畠先生の話ではこれはあくまで表向きの話しであって、実際には切っているらしい。学生実習もかなりの回数があるようだ。

実習棟の宿泊定員は52名ということで、途中ですこし抜け出て勝手に実習棟を見学する。講義室の隣が食堂で、汚い暖炉には薪がくすぶっている。その横が厨房で女性の話し声が聞こえ何か臭い料理の匂いがする。反対側の廊下にはトイレ、その次が宿泊室で木製２段ベット２本で４人部屋が10室あまり並んでいる。平屋建で窓は小さく陰気である。コンクリートがむき出しで冷たい感じのする建物であった。しかし、我が芦生演習林の施設と比べれば立派なものである。

概要説明が終わり苗畑を見学する。速く歩くと息が切れるのでゆっくりついて来いという。苗はすべてマツであるが、ポツンポツンとしか植えられていない。周囲の山のマツは通直で樹高もあり、売ればよい収入になると思うのだが。遠くでは学生が暖炉に使う薪を作っているようだ。

ところでもう午後２時である。朝７時頃に機内食を食べたままで腹が減ってきたがいっこうに昼食のことはにはふれない。ここでは何もないので山を降りてからであろうか、よくわからない。

午後2時30分、見学も終わりバスに乗り込む。所長らしき人がバスの中まで送ってくれる、ところでよくタバコを吸う人だ。お礼に大阪の免税点で買ってきたタバコ（キャビン）を進呈する。グラシアス、グラシアスといって喜び、胸のポケットに納める。

登ってきた林道を引返し１時間ほど走り、15時50分に国道筋にあるレストランに入る。中はただならぬ臭いがする。紳士、淑女がビール、テキーラを手にしながら食事を楽しんでいる。メキシコは昼食がメインとなっているらしい。

井上さんに聞けば朝は9時30分に仕事が始まり午後3時まで、それから昼食を楽しみ午後6時から9時までは再び仕事。夕食は10時ごろ軽く取るらしいが、昼にアルコールが入れば午後の仕事はいいかげんなものであろう。ビールは注文したが、料理はメニューを見てもさっぱりわからない。通訳のマリアさんが適当に選んでくれる。

次々と料理が運ばれてくるが、臭くてとても入りそうにない。なかでも3～4cmぐらいの幼虫、サボテンに付くいも虫のようなものの油いため。これをタコス（トウモロコシの粉を煎餅風に焼いたもの）にくるんで、数種類のチレ（とうがらし）というピリリと辛いのを付けて食べるのだが、うまみは感じることなく一つでやめるが、マリアさんは満足そうな顔をしている。スープも土色でなにが入っているのかわからず、どろっとしていて臭くてまずく半分がやっとであった。すんなりと口に入るのはサボテンのサラダのみ。酒にいやしい性格で、ビールだけは喉をとおる。隣の席ではジャリンコがコーラを飲み満面に笑みを浮かべながら、この臭いのをうまそうに食べている。多分久し振りの高級料理なんだろう。

再びバスに乗り次の見学地である試験場のようなところへ着く。広い農場には世界から集められたマツが数十種植えられている。約2時間ほど説明を受けるが、ボケと疲れでメモを取るのも忘

れて、あまり記憶に残っていないが、日本のマツは植えられていなかった。井上さんが、明日は遺跡へいくので今日は少々遅くまで見学しますというが、すでに19時である。今日１日で明日のぶんの見学まで入っているようだ。

19時20分に出発。約１時間で今夜からの宿、メキシコ市内のホテルグリストルに到着。外はようやく暗くなってきた。la.selvaと違い涼しくて気持ちよい。

20時30分、井上さんがこれから夕食に出るという。疲れたのでホテルでゆっくりしたいのだが、そうもいかず全員でぞろぞろと出かける。近くに東京の銀座のようなところがあるというが、井上さんには悪いのだが、博多の中州の屋台に毛のはえたようなもので、歩道にテーブルとイスを置き、簡単な屋根を造ったレストラン兼飲み屋といったところだ。

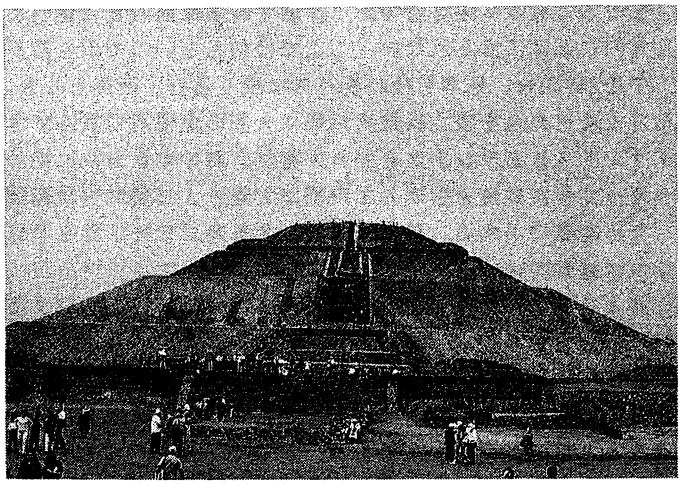
全員ビールを注文、案外うまいが銘柄によってはやはり臭いのがある。テキーラはうまい、メキシコ流にライムをかじり、塩をなめながら飲むが、やはり氷水がいちばん良い。腹が減っていたので何か少し食ったようだが忘れる。

食事をしていても物売りがよくくる。シャツ、楽器、靴磨き、その他もろもろ、うるさいほどである。24時ごろにホテルに帰る。シャワーを浴びウイスキーを軽くやりベットに入る。今日は長い１日であった。残るは明日１日のみ、睡眠不足と疲れでまたたく間に眠ったようだ。

６月１５日（土）

午前8時、年寄組がロビーに集まる。ホテルで久し振りに腹におさまる朝食で、果物がうまく、コヒーもよい。今日は良い天気である、10時ロビーに集合。

井上さんとマリアさんの案内でタクシーに分乗。約1時間でメキシコシティー北東にあるテオティワカン遺跡に着く。18km²にも及ぶ大遺跡で、その起源はいまだに謎とされているようで、一説には最古の古代文化であるオルメカ文化の影響を受けたトルテカ族が、紀元前2世紀ころから建造を始め、紀元7世紀にかけては人口10万人といわれる繁栄をみせたといわれているが、突然消えてしまったらしい。長雨による疫病が原因ではないかと考えられるが、この大宗教都市は14世紀にアステカ族がやってくるまでに廃虚となってしまった。アステカ族は壮厳さにうたれて、ここをテオティワカン（神々の都）と名付けたということである。



テオティワカンの太陽のピラミット

遺跡には太陽のピラミット（高さ65m）、月のピラミット（高さ46m）と大小2つがある。広大なところで、太陽のピラミットまでかなりの距離があり、ピラミットに登れるが、急な石段を登るのも疲れるため途中で中止、しばし休憩。皆は登ったらしいが林長も休憩。月のピラミットも途中まで、疲れることはすべてやらない。それにしても物売りが追っても追ってもやってくる。楽器、石の彫刻、ペンダント、フエなどで、“ニホンジントモダチ、メキシコジンビンボー、カッ

テ”とやってくる。2人も3人も付きまとわれば参ってしまう。そのうち要領をおぼへまったく無視すればだんだん来なくなってきた。林長はメキシコ風の楽器を買ったが、最初のところで買ったので高く、進むにしたがい安いのが出てきてくやむことしきり。

壮大な遺跡の見学も終わり、帰りにバイキング料理のレストランに入り昼食をとったが、パンがうまく果物も種類が多く食が進んだ。ここから博物館行きと買物組に別れ、井上さんにスーパーに案内してもらい17時にホテルへ帰る。汗をかいたのでシャワーを浴び、少々くつろぐ。

19時よりJICAの井上さんと通訳のマリアさんにお礼の食事を、大畠先生主催で神﨑林長、竹内先生らと2時間ほどホテルのレストランで過ごす。また明日も早起きである。井上さんらに2日間のお礼を述べ、部屋へ戻る。井上さんはこの8月、3年間のメキシコ勤務を終え日本に帰って来られる。

６月１６日（日）

4時30分に起きる。5時30分ロビーに集まり空港へ。全員沢山の荷物を持っているが、入国と違って出国はいたって簡単に終わる。さあ、これからが疲れる。メキシコ発8時、サンフランシスコまで4時間30分で、2時間の乗り替え時間で大阪まで11時間30分を要する。サンフランシスコを12時50分に出発し、関西空港には16時20分着で夜はない。飛行機で長時間空に浮いているのはいやだが、帰らなくてはならない。

今回の研修ではいろいろなことを勉強させていただいた。出発前には神﨑林長から資料を提供され、全員で数回勉強会を開き、それぞれテーマを持ち検討したが、もう一つどのような所か、なにをしているのか理解できなかったが、やはり現地を見、説明を受けることによって理解することができる。いろいろ見て学んできたことを、今後演習林へ一つでも多く取り入れることができるよう、努力するつもりである。

コスタリカ研修旅行では、神﨑林長始め参加された方々には大変お世話になりました。10日間もの長い間席を外し、職員の皆様方にはご迷惑をおかけいたしました。ここで紙面を借りましてお礼とお詫びを申し上げます。